高校の同級生と私
―私の軌跡―
インタビュー結果まで

A4　小出真澄

１、高校のクラスメイトの紹介

様々なコミュニティの中で生活していますが、私が特に大切に思っているのは高校の３年生の時のクラスメイトです。彼らと励まし合ったり、助け合ったり笑いあった１年間は、今でも思い出として私の心に残っています。

私は高３の夏に受験勉強でかなり悩んでいました。そんな時、クラスメイトの友達は自分の受験勉強の時間を削って私の話を聞いてくれました。家族と言い争いになっていて精神的に参っていた時でもあって、自分のことのように聞いてくれたクラスメイトには、とても感謝しています。家族と違い、「こうした方がいい」と直接答えを言ってくれた訳ではありませんし、結局相談してくれたことを全て活かすことはできませんでしたが、何より話をうんうんと頷きながら話を聞いてくれて「そうだよね、大変だよね」「真澄のためになる答えを出して欲しい」と受け止めてくれたことが嬉しかったのです。

受験勉強が本格的になってきてからは、男女関係なく一緒に教室で勉強したり、わからないところがあればお互い教え合ったり、時にはお互い分からない問題をにらめっこしながら悩んだりしていました。苦しいこともたくさんあった受験勉強も、彼らと共にいられたからこそ、今の自分がいるし、今ではこの１年間が１番楽しかった思い出になっています。

私にとって大切なコミュニティというのは、「自分」という個人を互いに認め合いながら互いの時間を共有しあえるものだと思っています。家族も似ている気がしますが、私の中では「悩んだ時に的確な答えを出して自分を導いてくれる人たち」と思っているので、若干異なります。家族という時間にはない仲間との共有した時間は、今もこれからも私には必要なものです。そんなコミュニティを大事にしていきながら、大学でも頑張っていこうともいます。

２、インタビュー相手

インタビューは今現在同じ大学に進学している同級生Ａさんにしようと思っています。その人は自分にとって、受験勉強でかなりお世話になった人です。勉強を教えてくれたり、面接演習に付き合ってくれたりしてくれました。特に印象に残っているのは、センター試験後の面接練習です。理由は受験勉強を共にした仲間として、自分のクラスメイトをどのように思っているのか知りたいと思ったのと、進学先が同じことから、自分と似たような進路をたどっていて、自分とどれくらい考え方が違うのか知ることができると思い、この人にしたいと思っています。

３、インタビューの結果

インタビューは大学の昼休みに、ご飯を一緒に食べながらインタビューさせていただきました。形にあまりこだわらず、普段話すような砕けた感じでインタビューすることで、

相手が表現しやすい言い方で、高校のクラスメイトに関する考えなどを聞けると思ったからです。

①高校のクラスメイトに対する思い、そのコミュニティについてどう思っているのか
→「とても楽しい１年だった」と言っていました。「同性間だけでなく、男女間でもあまりギスギスした感じはなく、行事などでは一緒に楽しむことができたいいクラスだ」と言ってくれました。これに関しては私も同じような考えを持っていて、そこからも自分の高校のクラスはとても仲の良いいいクラスだったのではないかと自信が持てました。また彼女は中学と高校でもクラスの雰囲気の違いにも注目していて、「中学では運動部と文化部との間で若干の距離が開いている気がしたが、高３の時のクラスは関係なく会話したり、遊んだりしていたことが、高校のクラスのいいところだ」と考えているそうです。
②自分が高３のクラスに対して思っていたこと、そこからクラスメイトをどう思っていたのか
→比較的おとなしめのＡさんは①のようにとても楽しい時間を過ごさせてもらっていたが、「自分がおとなしいせいで、席の近い男子に自分を楽しませようとよく話しかけてくれたことが、逆に申し訳ない」という感情があったそうです。おそらく彼らは彼女を笑わせようと（いい意味で）ただフレンドリーに話しかけていたと思うのですが、逆に彼女にとっては気にかけてくれて申し訳ないと知り、少し驚きました。
　また、「勉強のプレッシャーに対してなかなか友達と積極的に外で遊ぶことが少なかったため、今となってはもっとあそびたかった」とも言っていました。その頃を自分でも振り返ってみると、確かにＡさんは比較的クラスの中でも大人しく、自授業の合間でも席の近い同性の友達と話していたり、次の授業の予習をしていたりしていました。また、学校が終わったらすぐに家に帰る人だったので（それは今の変わりませんが）、あまり彼女と遊ぶ機会は少なかったと思います。
③部活に対する思い
→中学では吹奏楽部に所属していた彼女は、高校では音楽部に所属していました。今回の機会にと何故音楽部に入ったのかということも聞いてみました。
　私たちが通っていた高校は秋田南高校（以下「南高」表記にさせていただきます）の吹奏楽部は全国でもかなりレベルの高く、毎年全国大会に出るほどで、その分練習が大変・長い時間まで練習をする・きついという印象を受けがちでした。実際ほかの部活よりも練習日は多く、試験期間でも練習はよくありましたし、大会前になると練習は遅くなることもありました。ですが、部員との絆が学年を超えて出来て、精神面での成長がほかの部活よりもできる部活でもあります。自分も吹奏楽部に所属していて、私自身南高の吹奏楽部に入ったことで大きく成長できたと思っています。
　彼女の中にも少しその印象があって、「高校では勉強も大変そうだから」、と音楽に関わるほかの部活に入ったそうです。音楽部でもチェロという楽器を担当していました。
ですが、高校在学中も今も、「吹奏楽部に入っておけばよかった」と後悔していると語っていました。
③Ａさんにとっても「大切なコミュニティ」
→彼女にとって大切なコミュニティというのを聞いてみたところ、「家族」と答えてくれました。「というより、母親と仲がいい」とも言っていました。家族が大切だからなのか、「“家”

という環境がとても好きで、高校では放課後直ぐに家に帰ってしまうほど、家が恋しかった」そうです。母親とは「大学が休みの日に一緒に外出したり、近くの公園なのでスポーツをしたりなどをしている」と聞きました。

逆にほかの家族（父・妹）のことも聞いてみましたが、母親とほど仲がいいとは言えないようす。かなり静かな父親とは会話する回数がとても多く、妹とは最近では「～しなさい」「どうして～しないの」といったことしか言っていないと苦笑を漏らしながら話してくれました。

進路に関しては、父親は「～になった方がいいんじゃないか？」ということは言っていたが、母親は放任していたという話も出ていました。

①～③の回答から、自分とは少し違う考え方でクラスメイトと接していたということがわかりました。
もちろんクラスメイトといることはとても楽しかったという話がほとんどでしたが、家族（特に母親）の話では、時間を忘れるほど語ってくれました。

４、高校の同級生と私

高校生活というものだけではありませんが、特にクラスメイトとの関わりというのは、その「学校」という枠の中で濃く関わりを持ちます。確かに卒業した今でも、その時一緒だった仲間と集まって語り合うことはありますが､高校時代を繰り返すことはできません。私は同じクラスになった彼らに、とても助けてもらいました。だからこそ、彼らは私には大切なコミュニティなのです。

クラスメイト以上に時間を共にしているのは家族です。私がインタビューしたＡさんは「1 番に大切なコミュニティは家族」と言っていました。ですが、私には家族に負けないくらい、それ以上に大切に思っています。家族は私に将来の「道標」を見出してくれましたし、日常の寛ぎをくれます。ですが、同級生といるときはそれだけではなく、ふざけて笑い合える時間があるのです。そして共に思い出を共有できます。「ああ、あんなこともあったね」と何十年後に懐かしみながら、自身が辿った「軌跡」と振り返ることができます。自分の場合、家族とはあまり割って話すことが少ないため、より同級生に対する思いが強くなったと思います。

今は、卒業してしまって互いに会えず、メールをする位にしか絡むことがなく、たまに寂しく思う時があります。あの頃に戻ることはできません。ですが、年に１度でもいいから集まり、「ああ、あんなこともあった」と語っていきながら、現在何をお互いしているのかと語りたいです。そのコミュニティでは、そのようにして過ごしていきたいです。

そして私が彼らに助けてもらったように、私の彼らの力になれることがあるなら、力になりたいと思っています。「互いに助け合える仲間」として、これからもこのコミュニティが続けばいいなと祈っています。

「高校の友は、将来の友」という言葉にあるように、南高で出会った友達は、私にとって永遠の友といっても過言ではありません。友人関係を大切にしていきながら、今後も大学生活を過ごしていき、今ある「大学の同専攻の仲間」というコミュニティの中で生活していきたいと思います。

５、クラスについての感想（改善を希望する点）

講義時間は、もう少し早めに確立できればと思いました。

今回の講義内容は次の時間が昼休みであったため、比較的時間に余裕がありましたが、私たち学生にとって昼休みは時に忙しくなる時があります。講義時間が足りない、だから延長する、ということには特に異議はないのですが、より早めに連絡があれば、学生側も対処がより円滑にできるのではないかと思います。

また、提出するレポート内容（書き方）の連絡や補足説明が遅い印象があります。「このように書いて欲しい」というのが決まっているのであれば、書き終えてからではなく、連絡するときに説明があれば、全員が統一した書き方（「インタビューの時の雰囲気や流れを説明する文章も書いて欲しい」、など）や流れにできると思います。